

2304 実験的 neurogenic pulmonary edema の in vivo 標識赤血球による観察

内山 晓(山梨医大、放) 河内文雄、山岸文雄、
渡辺昌平(千大、肺研) 有水 昇(千大、放)

ショック時におこる肺水腫の発現機序について従来これは体循環から肺循環への大量の血液シフトが原因と考えられている。これを確認するため in vivo 標識法による $Tc-99m$ 赤血球を用いて、犬に実験的 neurogenic pulmonary edema をおこさせ、肺血液量の増加の有無をしらべた。

雑種犬の左室、右室にカテーテルを留置、ピロリン酸を用いて $Tc-99m$ 赤血球を in vivo でつくり、ガンマカメラを肺に当ててデータを処理装置に入力、犬の脳槽内にペラトリンを注入してショック状態をつくり肺の血液量の変化を時間放射能曲線に記録した。

ペラトリン注入後、左室圧、肺動脈圧の上昇とともに肺の放射能増加をみとめ、肺血液量の増加が確認された。一方肺水腫をおこさないノルアドレナリンでも同様の変化を得た。肺水腫発現には肺への血液シフトだけが原因とは考えられない。in vivo 標識赤血球は標識率が高く、血漿中の放射能が少ないとから肺水腫による影響をうけずに肺血液量の時間的変化を追跡する方法として有効であつた。